

## 第2節 地理歴史

### 第1 地理歴史科の基本的事項

#### 1 改訂のねらい

中央教育審議会は、平成20年1月17日に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申（以下「中教審答申」という。）を行った。この中教審答申においては、学習指導要領改訂の基本的な考え方が示されるとともに、各教科等の改善の基本方針や主な改善事項が示されている。この中で、社会科、地理歴史科、公民科の改善方針及び高等学校地理歴史科・公民科の改善の具体的な事項については、次のように示された。

#### (1) 改善の基本方針

ア 社会科、地理歴史科、公民科においては、その課題を踏まえ、小学校、中学校及び高等学校を通じて、社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る。

イ 社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、それらを活用する力や課題を探究する力を育成する観点から、各学校段階の特質に応じて、習得すべき知識、概念の明確化を図るとともに、コンピュータなども活用しながら、地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する方向で改善を図る。

ウ 我が国及び世界の成り立ちや地域構成、今日の社会経済システム、様々な伝統や文化、宗教についての理解を通して、我が国の国土や歴史に対する愛情をはぐくみ、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する方向で改善を図る。

#### (2) 改善の具体的な事項

中学校社会科の学習を踏まえ、各科目の特質と相互の関連性を考慮しながら、習得した知識、概念や技能を活用して、世界や日本の歴史的事象や地理的事象、現代社会の諸事象について考察し、その内容を説明したり自分の考えを論述したりすることを通して、社会的事象についての見方や考え方を成長させるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を一層深めることを重視して、次のような改善を図る。

地理歴史科については、我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を一層深めさせるよう科目間の関連を重視するとともに、各科目で専門的な知識、概念や技能を習得、定着させ、それらを活用できるよう改善を図る。その際、地図を活用した学習を一層重視する。

ア 「世界史A」については、地図、年表、資料などを活用し、地理的条件や日本の歴史との関連に一層留意しながら、諸文明の特質と現代世界の形成過程を理解させるとともに、人類の諸課題を追究する学習などを通して、現代世界に関する認識を深め、歴史的思考力を培うようにする。

イ 「世界史B」については、地図、年表、資料などを活用し、諸地域の地理的条件や日本の歴史との関連に留意しながら、世界の歴史の大きな枠組みと流れを理解させ、文化の多様性・複合性に関する認識を深めさせるとともに、適切な主題を設定して追究する学習を一層重視して、世界史の学び方や歴史的思考力を培うようにする。

ウ 「日本史A」については、様々な資料を活用し、地理的条件や世界の歴史と関連させながら、課題を追究する学習を重視して、我が国の近現代の歴史や現代社会の成り立ちについて理解させ、歴史的思考力を培うようにする。

エ 「日本史B」については、様々な資料の活用を重視し、地理的条件や世界の歴史と関連させながら、適切な主題を設定して追究する学習などを通して、我が国の歴史の展開を総合的に理解させ、伝統や文化の特色についての認識を深めさせて、歴史的思考力を培うことを一層重視する。

オ 「地理A」については、防災などの生活圏の地理的課題に関する地図の読図・作図及び地域調査などの作業的、体験的な学習を充実し、実生活と結び付いた地理的技能を身に付けさせるとともに、環境、資源・エネルギー問題などの現代世界の諸課題や持続可能な開発の在り方などについて地域性や歴史的背景を踏まえて考察させ、地理的な見方や考え方を培うことを一層重視する。

カ 「地理B」については、現代世界の自然環境、資源、産業、人口、都市・村落、人種・民族などに関する地理的事象の分布やその要因などについて体系的に考察させるとともに、それらの学習で習得した知識、概念や地理的技能を活用して、世界諸地域の地域的特色を歴史的背景に留意して多面的・多角的に考察させ、地理的な見方や考え方を培うことを一層重視する。

## 2 地理歴史科の目標及び科目の編成等

### (1) 地理歴史科の目標

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。

目標は次の三つの部分から構成されている。

第1の部分は「我が国及び世界の形成の歴史的過程…についての理解と認識を深め」させるというところで、これは主として歴史（世界史と日本史）の学習内容を示したものである。我が国の形成の歴史的過程については、世界史的視野に立って、我が国を取り巻く国際環境（世界の歴史）との関連で理解させ、また世界の形成の歴史的過程については、諸地域世界の歴史と相互の交流・結合の歴史を通じて大きな流れを理解させるとともに、それと我が国の歴史との結び付きを考えさせ、これらを通して歴史的思考力を培おうとするものである。一方、歴史的事象は地理的環境の上に展開してきたものであり、この部分はまた地理的内容にもかかわるものである。

第2の部分は「我が国及び世界の…生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め」させるというところであり、これは主として地理の学習内容を示したものである。世界の人々の生活・文化に関する地域的特色と共通の課題、自然環境及び社会環境の関連、諸地域相互の関連を理解させ、これらを通して地理的な見方や考え方を培おうとするものである。一方、諸地域の生活・文化は人間と自然との関係の中で歴史的に形成されてきたものであり、この部分はまた歴史的内容にもかかわるものである。

第3の部分は「国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う」というところである。これは地理歴史科がその学習を通じて目指す最終的なねらいを示したものである。平成18年の教育基本法改正を受けて、「平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として」という部分の表現をこのように整えた。「主体的に生き」とは、自らが国際社会の中で価値ある国家・社会を形成していく責任を自覚し行動することを意味している。また、「平和で民主的」とは国家・社会が維持・発展させるべき価値を示しており、そうした国家・社会を構成すると同時に自らが責任と自覚をもってその形成に主体的にかかわる存在であることが求められている。国際的な相互依存が進む中で、自らが国際社会の形成者であること、また、自らがよって立つ平和で民主的な国家・社会を維持・発展させることについての日本国民として必要な自覚と資質を養うことが、この

教科の最終的な目標である。

### (2) 科目の構成

地理歴史科は、従前と同様に、次の6科目をもって構成されている。

科 目	標準単位数
世界史 A	2 単 位
世界史 B	4 単 位
日本史 A	2 単 位
日本史 B	4 単 位
地 理 A	2 単 位
地 理 B	4 単 位

世界史、日本史、地理においてそれぞれ標準単位数2単位と標準単位数4単位の科目を設置して、多様な選択を可能にし、生徒の特性、進路等の一層の多様化に対応しようとした前回までの改訂の趣旨を継承している。

また、履修についても、従前と同様に、「世界史A」及び「世界史B」のうちから1科目並びに「日本史A」、「日本史B」、「地理A」及び「地理B」のうちから1科目の合計2科目・4単位以上を必修としてしている。

### (3) 科目の履修

地理歴史科の6科目については、「世界史A」、「世界史B」から1科目と、「日本史A」、「日本史B」、「地理A」、「地理B」から1科目を必ず履修することになっており、組合せとして多様な選択が可能である。世界史、日本史、地理のそれぞれにある、標準単位数2単位のAが付された科目と標準単位数4単位のBが付された科目は、前者が後者を要約・簡略化したものではなく、それぞれが重点目標や独自の内容構成をもつ科目である。しかし、一方で「世界史A」と「世界史B」、「日本史A」と「日本史B」、「地理A」と「地理B」は、それぞれ世界の歴史、日本の歴史、日本を含む世界の地理に関する学習として共通の性格と目標をもっており、内容の重複した部分もある。このことを配慮した科目の選択履修を指導することが必要である。

## 3 指導計画の作成

### (1) 調和のとれた指導計画の作成と他の教科・科目相互の関連

地理歴史科においては、「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め」という教科の目標に即し、教科全体として調和のとれた科目選択が行われるよう留意して、指導計画を作成することが望ましい。

また、地理歴史科は中学校社会科の学習の成果の上

に立って、高等学校生徒の発達段階や科目の専門性を考慮して学ばせるものであり、各科目の内容は、特に中学校社会科地理的分野、歴史的分野との関連が深いことや、公民科の各科目と相互に関連する部分が多いことなどの点も考慮して、指導計画を作成するよう留意することが大切である。

こうした点に配慮しながら、各学校における教育課程は、地域、学校の実態や生徒の特性・進路等に応じて編成、実施されるものであることを踏まえ、各学校の教育課程の中で適切に指導計画を作成することが必要である。

## (2) 情報の活用と作業的、体験的な学習

地理歴史科においても、自主的、積極的な学習活動を通じて、自ら考え正しく判断できる力を育成するという観点から各種資料の利用、観察、見学、調査などの作業的、体験的な学習を導入しつつ、情報活用能力を培うことは重要である。

作業的、体験的な学習は生徒の学習に対する興味・関心を高め、構成力や創造力を育成するのに適した方法である。そのためには科目の特性に応じ、適切な指導方法を選び、生徒や地域の実態を考慮し、指導計画を作成することが大切である。

地理歴史科の各科目では、生徒の見学や実地調査の困難な主題も少なくないが、コンピュータや情報通信ネットワークなどを活用すれば、幅広く最新の情報を集めることができ、集めた情報を吟味したり整理したりすることを通じて生徒の学習意欲を育てることも可能になる。地理歴史科においてもコンピュータや情報通信ネットワークなどを積極的に活用するとともに、情報手段を主体的に活用できる学習の工夫が求められている。その際、情報モラルの指導にも十分に留意する必要がある。

## (3) 課題を探究する学習を柱とする言語活動の充実

今回の改訂では、基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習活動、これらの活用を図る学習活動及び総合的な学習の時間を中心とした探究活動といった学習の流れを重視し、基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成をバランスよく図ることとしている。

地理歴史科においては、例えば、「世界史A」に「現代世界の特質や課題に関する適切な主題を設定させ、歴史的観点から資料を活用して探究し、その成果を論述したり討論したりするなどの活動を通して、世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させる」項目、「日本史B」に「社会と個人、世界の中の日本、地域社会の歴史と生活などについて、適切な主題を設定させ、資料を活用して探究し、考え

を論述する活動を通して、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」項目を新設するとともに、「地理A」や「地理B」の内容の取扱いに「地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論したりするなどの活動を充実させること」を示すなど、教科の特質に応じた言語活動の充実を図っている。

## 第2 各科目の概要

### 1 「世界史A」

#### (1) 目標

近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

目標は次の各部分から構成されている。

第1の部分は、「近現代史を中心とする世界の歴史を」というはじめの部分である。ここでは世界史Aの学習内容を明確に示している。すなわち、世界の歴史の展開を、全時代にわたって均等に扱うのではなく、近現代史を中心に扱うことを示している。

第2の部分は、「諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって」の部分である。ここでは、学習の展開と方法にかかわるねらいを示している。「諸資料に基づき」という部分は、年表・地図その他資料の活用を通して世界の歴史を理解することで、「知識基盤社会」と言われる今日の社会の構造的変化に対応していくための思考力・判断力・表現力等の育成を図ることをねらいとしている。特に前半部分では、小・中学校で日本と世界の地理や日本の歴史の学習が行われているという現状や、世界史が引き続き地理歴史科共通の必修科目であることを踏まえ、地理的条件や日本の歴史と関連付けて理解すべきことを、また後半部分は、世界の歴史の理解を踏まえて、現代の人類が直面する課題を政治、経済、社会、文化、宗教、生活など様々な観点から考察することを示している。

第3の部分は、「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。」という文末の部分である。これはこの科目を通して培うべき能力や態度を示している。いかなる国、地域も他国、他地域との関係を離れては存在できない現代において、世界の構造や成り立ちを歴史的視野から考察する能力、自己の属する国や地域の理解の上に、他国、他地域との協力関係を築いていく態度は、いずれも不

可欠の条件と言える。

こうした認識に立って、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことが、この科目の最も重要なねらいである。

## (2) 内容の構成

「世界史A」の内容は、

- ① 世界史へのいざない
- ② 世界の一体化と日本
- ③ 地球社会と日本

の三つの大項目にまとめられている。

年表、地図、その他の資料を活用する学習を通じて思考力、判断力、表現力等の育成を図るとともに、主題を設定して探究する学習を設定することにより、言語活動の充実を図ることとしている。

①は、今回の改訂で設けられた新項目である。自然環境と歴史にかかわる主題や、日本の歴史と世界の歴史のつながりにかかわる主題を設定し考察する活動を通して、世界史学習に必要な視点や方法を示し、地理と歴史への関心を高め、世界史学習の意義に気付かせることをねらいとしている。

②では、近現代世界を理解するための前提として、ユーラシアの諸文明の特質に触れるとともに、16世紀から19世紀までの世界商業の進展及び資本主義の確立を中心に扱い、世界が一体化に向かう過程とそれに伴う世界の変容を理解させることをねらいとしている。従前、「諸地域世界と交流圏」「一体化する世界」の二つの大項目から構成されていたものを一つにまとめ、前近代史の精選と近現代史の一層の重視という改訂のねらいを明確にしたものである。指導の際には、世界の動向と日本とのかかわりに十分留意する。

③は、19世紀後期以降の世界を扱い、地球規模で一体化した構造をもつ現代世界の特質と展開過程を日本とのかかわりに着目させながら理解させ、人類の課題について歴史的観点から考察させることをねらいとしている。

## (3) 指導計画の作成

### ア 基本的な考え方

「世界史A」では、世界の歴史の大きな枠組みと展開を、近現代史を中心に学習する。世界史が地理歴史科共通の必修科目であることを考慮して、近現代世界の形成過程を諸資料に基づき、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら、生徒の主体的な学習を通して、歴史的思考力を培うよう、指導計画を作成する必要がある。

### イ 指導計画作成の手順

#### (ア) 指導目標の明確化

教科・科目の目標や内容構成の趣旨を的確にとら

え、生徒の実態等を踏まえて、指導目標を明確にする。

#### (イ) 適切な時間配当と内容構成の工夫

標準単位数を考慮して、年間の授業時数や生徒の実態などを配慮した年間授業計画を作成する。特に、主題を設定して行う学習を踏まえ、時間配当や内容構成を工夫する。

#### (ウ) 指導方法の工夫

学習形態や指導方法については、学習の内容やテーマに合わせて創意工夫する。特に主題を設定して行う学習では、生徒の思考力・判断力・表現力等の育成が図られるよう、ディベートやプレゼンテーションソフトを活用した発表等、生徒の実態に応じた新たな取組が求められる。また、主題を設定して行う学習を踏まえ、時間配当や内容構成を工夫する。

#### (エ) 評価の工夫

評価方法の工夫・改善に取り組み、指導と評価を一体化させ評価計画を作成する。

#### ウ 指導計画作成上の配慮事項

(ア) 基本的な事項・事柄を精選して指導内容を構成するとともに、各時代において世界と日本を関連付けて扱うこと。また地理的条件とも関連付けるようにすること。

(イ) 年表、地図その他の資料を積極的に活用したり、文化遺産、博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりするなどして、具体的に学ばせるように工夫すること。

#### (4) 指導上の留意点

ア 主題を設定して行う学習の実施に当たっては、適切な時間を確保し、年間指導計画の中に位置付けて指導すること。また、主題の設定や資料の選択に際しては、生徒の興味・関心や学校、地域の実態等に十分配慮して行うこと。

イ 近現代史の指導に当たっては、客観的かつ公正な資料に基づいて歴史の事実に関する理解を得させるようにすること。

ウ 近現代史の指導に当たっては、政治、経済、社会、文化、宗教、生活など様々な観点から歴史的事象を取り上げ、近現代世界に対する多角的で柔軟な見方を養うこと。

#### (5) 主題を設定し、探究させる活動の指導計画例

学習指導要領「世界史A」の「2 内容 (3) 地球社会と日本」の「オ 持続可能な社会への展望」は、(3)のア～エに示された事項を参考にし、現代社会の特質や課題についての適切な主題を生徒に設定させ、歴史的観点から資料を活用して探究する活動を通して、世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させることをねらいとしている。この項

目は、今回の改訂における改善の柱の一つとして言語活動の充実が取り上げられたことに対応して、新たに設けられたものである。

「持続可能な開発のための教育（E S D）」については、2002年のヨハネスブルグ・サミットにおいて、我が国が「持続可能な開発のための教育の10年」を提案して各国政府や国際機関の賛同を得、さらに同年の第57回国連総会において、2005年からの10年間でE S Dの10年とする旨の決議案を提出して採択された。世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困削減、環境の保全と回復、天然資源の保全、公正で平和な社会の実現などを基礎として、環境の保全、経済の開発、社会の発展を調和の下に進めていくことが持続可能な開発である。そのためには、まず、一人一人が世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育がE S Dである。

ア 「科学技術の発達と課題」という主題を生徒が設定した場合、例えば「電話機の歴史的変遷」として、現在の携帯電話からベルが発明した電話機までたどる資料を参考としたり、「自動車開発の歴史」として、現在のハイブリッド車や電気自動車からダイムラーが発明したガソリンエンジン自動車までをたどる資料を参考としたりして、それらの「モノ」が社会にもたらした光と闇の部分それぞれについて、考察や討論をさせる学習活動が考えられる。

イ 「第2次世界大戦後に発生した戦争（紛争）と国際社会」という主題を生徒が設定した場合、例えば「ベトナム戦争と日本とのかかわり」、「第4次中東戦争とオイルショック」、「9・11テロと日本とのかかわり」に関する資料などを参考にして、戦争（紛争）発生の原因、経過や国際社会、とりわけ日本に与えた影響を考察し論述させる学習活動が考えられる。

## 2 「世界史B」

### (1) 目標

世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

目標は、次の各部分から構成されている。

第1の部分は、「世界の歴史の大きな枠組みと展開を」という初めの部分である。ここでは「世界史B」の学習内容を明確に示している。すなわち、「世界史B」は、古代から現代に至る世界の歴史の展開を、諸地域世界

の動向に焦点を当てながら、その形成、交流と再編、結合と変容、及び地球世界の形成という大きな時間的枠組みの中で理解させようとするものである。従前「大きな枠組みと流れ」となっていたものを「大きな枠組みと展開」と改めたのは、世界の歴史を構造的に理解させるという趣旨を明確にするためである。

第2の部分は、「諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史を関連付けながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって」までの部分である。ここでは、学習の展開と方法にかかわるねらいを示している。「世界史A」と同様、「諸資料に基づき」という部分は、年表、地図その他資料の活用を通して世界の歴史を理解することで、「知識基盤社会」と言われる今日の社会の構造的変化に対応していくための思考力・判断力・表現力等の育成を図ることを目指している。特に前半部では、小・中学校で日本の歴史や日本及び世界の地理の学習が主に行われているという現状や、世界史が地理歴史科共通の必修科目であることを踏まえ、地理的条件や日本の歴史と関連付けて理解すべきことを、また後半部では、世界の歴史における文化・文明の多様性・複合性を諸地域世界の接触や交流に着目して考察したり、現代世界の特質を様々な要素の関連の中で考察したりすべきことを示している。

第3の部分は、「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。」という文末の部分で、「世界史A」の目標と同じ表現となっている。「世界史A」と「世界史B」は、構成や学習内容に相違があり、それぞれ独立した科目となっているが、世界史を学習することによって得られる能力や態度に関しては共通の目標を設定している。他国や他地域の歴史を理解し、自国と世界との関わりを学び、日本の歴史や文化をより客観的に見る目を養う。そして、世界の形成の歴史的過程、文化の多様性・複合性や現代世界の特質などを学習することによって、歴史的思考力を培う。これらを通じ、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことが、この科目の最も重要なねらいである。

### (2) 内容の構成

「世界史B」の内容は、

- ① 世界史への扉
- ② 諸地域世界の形成
- ③ 諸地域世界の交流と再編
- ④ 諸地域世界の結合と変容
- ⑤ 地球世界の到来

の五つの大項目にまとめられている。

①は、自然環境と人類の活動にかかわる主題、日本

の歴史と世界の歴史のつながりにかかわる主題、日常生活に見る世界の歴史にかかわる主題を取り上げ、世界史を学ぶ際に必要な視点を示し、地理と歴史への関心を高め、世界史学習の意義に気付かせることをねらいとしている。

②では、人類の誕生から世界各地に地域世界が形成された過程を扱い、農耕・牧畜の始まり、都市文明の成立を経て、西アジア・地中海、南アジア・東南アジア、東アジア・内陸アジアの諸地域に、それぞれの自然環境に適応しながら独自の地域世界が形成されたことを把握させるのをねらいとしている。

③では、古代の西アジア世界・地中海世界が展開した地域に、新たにイスラーム世界とヨーロッパ世界が形成されていく過程を概観させるとともに、イスラームの拡大が海域及び内陸のネットワークの整備を促し、諸地域間の交流を活発にしたこと、またそうした中から台頭したモンゴルの動向がユーラシア諸地域の再編に及ぼした影響などを把握させることをねらいとしている。

④では、16世紀から19世紀までの世界の動向を扱い、アジアの富を求めてヨーロッパの拡大が起こり、それを契機に諸地域世界の交流がユーラシア規模から地球規模へと拡大したこととともに、主権国家体制を整え工業化を達成したヨーロッパの進出により、世界の構造的な一体化が進展し、社会の変容が促されたことを理解させるのをねらいとしている。

⑤では、19世紀後期以降の世界を扱い、科学技術の発達や生産力の発展を背景とした地球規模での世界の一体化と相互依存の強まりについて理解させ、人類が直面する課題を考察させるとともに、21世紀の世界を展望させることをねらいとしている。現代世界については現代世界の基本的要素が出現し始めた19世紀後期から取り上げることとして、「帝国主義と社会の変容」をこの大項目で扱うこととしている。

### (3) 指導計画の作成

#### ア 基本的な考え方

「世界史B」は、世界の歴史の大きな枠組みと展開を学ぶ科目である。また、今回の改訂では主題を設定して行う学習を各大項目に設けて段階的・継続的に指導することとし、歴史的な見方や考え方を深化させ、歴史的思考力を培うことを目指している。

「世界史B」は、詳細で専門的な世界の歴史を学ばせようとするものではない。世界の歴史への興味・関心を引き出しそれをもとに世界の歴史の基本的な事項を理解させるとともに、それぞれの大項目の内容に示された事項を参考にして主題を設定し、生徒の主体的な学習を通して歴史的思考力を培うよう、指導計画を作成する必要がある。

#### イ 指導計画作成の手順

##### (ア) 指導目標の明確化

教科・科目の目標や内容構成の趣旨を的確にとらえ、生徒の実態等を踏まえて、指導目標を明確にする。

##### (イ) 適切な時間配当と内容構成の工夫

標準単位数を考慮して、年間の授業時数や生徒の実態などを配慮した年間授業計画を作成する。

特に、主題を設定して行う学習を踏まえ、時間配当や内容構成を工夫する。

##### (ウ) 指導方法の工夫

主題の設定や資料の選択に際しては、生徒の興味・関心や学校、地域の実態等に配慮して行う。また、段階的・継続的に指導することにより、歴史的思考力を培い、言語活動の充実を図る。

##### (エ) 評価の工夫

評価の工夫・改善に取り組み、指導と評価を一体化させ評価計画を作成する。

#### ウ 指導計画作成上の配慮事項

##### (ア) 指導内容の精選

基本的な事項・事柄を精選して指導内容を構成するとともに、各時代における世界と日本を関連付けて扱うこと。また、地理的条件とも関連付けるようにすること。

##### (イ) 具体的に学ばせる工夫

年表・地図その他の資料を積極的に活用したり、文化遺産、博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりするなどして、具体的に学ばせるように工夫すること。

##### (4) 指導上の留意点

ア 各地域の人々の生活、宗教、意識などを具体的に把握できるようにし、政治史のみの学習にならないようにすること。

イ 「地球世界の到来」については、知識を与えるだけでなく、地球世界の課題について考察させるようにすること。その際、核兵器などの脅威に着目させ、平和で民主的な社会を実現させることが重要な課題であることを認識させるようにすること。

ウ 主題を設定して行う学習については、適切な時間を確保し、年間指導計画に位置付けて段階的・継続的に実施する。また、主題の設定や資料の選択に際しては、生徒の興味・関心や学校、地域の実態等に十分配慮して行うこと。

エ 近現代史の指導に当たっては、「1 世界史A」の「(4) 指導上の留意点」と同様に扱うとともに、広い視野から世界の動きをとらえさせるようにし、世界の歴史における日本の位置付けを明確にすること。

##### (5) 主題を設定し探究させる活動の指導計画例

思考力・判断力・表現力等の育成を重視し、主題を設定して行う学習をすべての大項目に置き、段階的・継続的に指導することで、歴史学習の基本的技能を習得させ、言語活動の充実を図る。

「世界史への扉」では、中学校社会科の内容との連続性に配慮して、教師が主題を設定し、考察の過程を指導する。例えば、「ア 自然環境と人間のかかわり」においては、麻、リネン（亜麻）、木綿、絹、羊毛、カシミアといった天然繊維を取り上げ、現物に触れさせるとともに、その原材料や原産地および各地への広まりなどについて調べさせ、考察させることが考えられる。また、「ウ 日常生活に見る世界の歴史」においては、古い歴史を持つ撥弦楽器（ギター、マンドリン、ハープ、リュート、琴、琵琶、カーヌーン等）を取り上げ、その音色を鑑賞させるとともに、各地域でどのようなものがあるか、代表的な楽器の起源や違いを調べさせることなどが考えられる。

「諸地域世界の形成」の「時間軸から見る諸地域世界」においては、時間的なつながりに着目して、設定した主題に関連する事項を年代順に並べたり、因果関係で結び付けたり、地域世界ごとに比較するなどの活動を行わせる。「諸地域世界の交流と再編」の「空間軸から見る諸地域世界」においては、ユーラシア規模での交流や新たな諸地域世界の形成や再編について、同時代性に着目して主題を設定し、空間的なつながりに着目して整理し、表現する技能を習得させる。例えば、「諸地域世界の交流と再編」の「ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界」では、イブン＝バトゥータの旅行記を取り上げ、地図化し、地図上の地名を結んだり、訪れた地域を宗教別に色分けしたりすることも可能である。また、その際に使用したイスラームのダウ船と中国のジャンク船の違いから、それぞれの貿易圏を区別することなどが考えられる。

「諸地域世界の結合と変容」の「オ 資料からよみとく世界の歴史」では、およそ16世紀から19世紀までの資料を取り上げて多面的・多角的に考察し、よみとく技能を習得させる。例えば、「イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界」では、ミケランジェロの『ピエタ』を取り上げ、中世の聖母子像との違いを考えさせたり、古代の彫刻とは異なりマリアとイエスの身長差をあえて設け、見る人の角度を計算して制作している点などに気付かせたりすること等が考えられる。また、「ウ 産業社会と国民国家の形成」では、グランヴィルやドーミエなどのフランス風刺画家の絵を取り上げ、ルイ＝フィリップを示すモチーフとして用いられた「洋梨」を示すことにより、複雑なフランスの政治的変革を調べさせることなどが考えられる。「時間軸から見る諸地域世界」、「空間軸から見る諸地域世界」とあわ

せ、作業的、体験的な学習活動を取り入れることで学習に主体的に参加させ、歴史的な考察方法を習得させ、歴史的思考力の育成を図る。

「地球世界の到来」の「資料を活用して探究する地球世界の課題」では、「世界史B」の学習のまとめであることを踏まえ、生徒自身が主題を設定し、これまでの学習で習得した知識や技能を有効に活用して、歴史的観点から主体的に考察する活動である「探究」を重視する。例えば、「これからの世界と日本の在り方」について展望する際、生徒が「イ 二つの世界大戦と大衆社会の出現」に示された事項を参考にして、「大衆社会と戦争」という主題を設定した場合には、当時の国際政治・経済と欧米諸国や日本の社会状況を対比させながら、戦争に突き進むことになった背景や原因を探究させるなどの活動が考えられる。

### 3 「日本史A」

#### (1) 目標

我が国の近現代の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付け、現代の諸課題に着目して考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

目標は、次の各部分から構成されている。

第1の部分は、前半の「我が国の近現代の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付け、現代の諸課題に着目して考察させることによる」までである。ここでは、「日本史A」の基本的な性格として、近現代の我が国の歴史を学習対象とすることを明確にしている。指導に当たっては、同じ地理歴史科の世界史や地理との関連を一層重視して、地理的条件や世界の歴史と関連付けて学習を進めるとともに、現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から、現代の諸課題に着目して考察させるようにする。なお「考察させる」とは、調べ考えることを重視して理解させることを意味している。

第2の部分は、後半の「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」の部分で、「日本史B」と同じ文言である。これは、この科目を学習することによって得られる能力や態度に関する目標である。諸事象の本質をその歴史的な形成・展開の過程の実証的な考察によってとらえる歴史的な見方や考え方を身に付け、歴史的な思考力の育成を図るとともに、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことが、この科目の最終的なねらいであることを示している。

#### (2) 内容の構成

「日本史A」の内容は、

- ① 私たちの時代と歴史
  - ② 近代の日本と世界
  - ③ 現代の日本と世界
- の3つの大項目からなっている。

①は、この科目の導入として位置付けられており、近現代の歴史的事象と現在との結び付きを考察させる学習活動を通して、歴史への関心を高め、歴史を学ぶ意義に気付かせることをねらいとしている。

②では、開国前後から第二次世界大戦の終結までを扱い、政治、経済、国際環境、国民生活、文化の動向を相互に関連させて考察させることをねらいとしており、歴史の展開と生徒自身との結び付きに気付かせることに留意して、諸事象を国民生活にかかわらせて考えさせることを重視している。

③では、第二次世界大戦終結以降を扱い、政治、経済、国際環境、国民生活、文化の動向が相互に関連していることに着目させるとともに、現在の社会が歴史的に形成されてきたものであり、特に近現代の歴史と深いかわりをもつという観点から、現在の諸課題を近代以降の歴史にかかわらせて考察させ、世界における日本の立場についての理解と認識を深めることをねらいとしている。

### (3) 指導計画の作成

#### ア 基本的な考え方

中学校段階までの歴史学習において、日本の歴史に関しては全時代を通して大きな流れをとらえる学習をしていることを踏まえ、近現代を対象とした科目という性格を明確化することが大切である。また、歴史の展開をその推移や変化、因果関係等の考察を通して大きくとらえることや、主題を設定するなどして主体的に探究し表現する活動を一層重視することも必要である。

#### イ 指導計画作成の手順

##### (ア) 指導目標の明確化

教科・科目の目標や内容構成の趣旨を的確にとらえ、生徒の実態等を踏まえて、指導目標を明確にする必要がある。

##### (イ) 授業時数の配分と内容構成の適正化

時間配分と内容構成を適正に行うように工夫する。

##### (ロ) 歴史を考察し表現する学習の重視

「私たちの時代と歴史」、「近代の追究」、「現代からの探究」という一連の学習を計画的に行うことで、歴史学習にかかわる基本的な技能を高めるようにする。

##### (ハ) 指導と評価の一体化

評価方法の工夫・改善に取り組み、指導と評価を一体化させ評価計画を作成する。

#### ウ 指導計画作成上の配慮事項

##### (ア) 国際環境や地理的条件との関連について

我が国の近現代の歴史の展開について国際環境や地理的条件などと関連付け、世界の中の日本という視点から考察させること。

##### (イ) 指導内容の精選について

指導内容は、科目の目標に即して基本的な事項・事柄を精選して構成すること。

##### (ロ) 諸資料の活用について

年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫すること。

##### (ハ) 国民生活や文化の学習について

国民生活や文化の動向については、地域社会の様子などと関連付けるとともに、衣食住や風習・信仰などの生活文化についても扱うようにすること。

##### (4) 指導上の留意点

ア 客観的かつ公正な資料に基づいて、事実の正確な理解に導くようにするとともに、多面的・多角的に考察し公正に判断する能力を育成するようにすること。その際、核兵器などの脅威に着目させ、戦争を防止し、平和で民主的な国際社会を実現することが重要な課題であることを認識させること。

イ 「私たちの時代と歴史」については、この科目の導入として位置付けること。また、近代、現代などの時代区分の持つ意味、近現代の歴史の考察に有効な諸資料についても扱うこと。

ウ 「近代の追究」、「現代からの探究」については、資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を高めること。

エ 「現代からの探究」については、この科目のまとめとして位置付けること。

##### (5) 歴史を考察し表現する学習と導入・まとめの重視について

今回の改訂では、「日本史A」の内容に「私たちの時代と歴史」、「近代の追究」、「現代からの探究」の各項目を設けた。これは、言語活動を充実させ、習得した知識・概念のより深い理解と定着を図るとともに、従前の大項目「(1) 歴史と生活」の趣旨を継承して、それを学習計画の中に明確に位置付け、資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を高めて、歴史的な見方や考え方を身に付けさせることをねらいとするものである。

「私たちの時代と歴史」は、この科目の導入として位置付けられている。身の回りの具体的な社会的事象を取り上げ、そこから疑問を見いださせたりその成り立ちの経緯に目を向けさせたりして、各事象が近現代の歴史と深くかかわっていることに気付かせるよう工



夫する。例えば、学校の所在地を、埼玉県立文書館所蔵の明治期の地図と現在の地図を比較させ、市町村名、地名、市街地、鉄道、道路の変遷などを通して、地域における近代化の過程を考察させることができる。このような学習を通じて歴史への関心を高め、歴史を学ぶ意義に気付かせるようにする。

「近代の追究」は、近代にかかわる学習内容を踏まえて適切な時期に実施する。近代における政治や経済、国際環境、国民生活や文化の動向が相互に深くかかわっているという観点から、教師による例示や助言を踏まえながら、身近な生活文化や地域社会の変化などにかかわる出来事が政治や経済など国家レベルの歴史と深くかかわっていることを認識できるような適切な主題を設定して追究し表現することができるようにする。例えば、「太平洋戦争の戦局の推移と本土空襲はどのような関連性をもっていたか」という主題を設定し、空襲を体験した方への聞き取り調査などの活動を通して、当時の戦局と国民生活との関連を考察させることができる。

「現代からの探究」は、この科目のまとめとして位置付けられている。科目の導入「私たちの時代と歴史」で培った関心や課題意識を受けて、現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から、生徒自らが自分の関心を踏まえた適切な主題を設定して探究し表現することができるようにする。例えば、「修学旅行はどのように変わってきたのか」という主題を設定し、明治時代から今日までの修学旅行の見学地等を調べ、当時の旅行のねらいと歴史的背景について探究させる。この探究を通して、今日の高校の修学旅行の在り方について生徒自身の考えをまとめて発表させることができる。

指導計画の作成に当たっては、この歴史を考察し表現する学習を指導計画の中に明確に位置付け、導入・まとめとしての項目同士の位置付けや育てる技能の関係に留意して、計画的・継続的に実施する。

あわせて、平素の学習においても課題解決的な学習を取り入れるよう工夫し、各単元や単位時間の学習の導入の過程で生徒に明確な課題意識をもたせたり、まとめの過程で考察した成果を生徒自身の表現でまとめさせてその定着を図ったりする必要がある。例えば、導入で生徒に自覚させる学習課題としては、次のようなものが考えられる。

- ① どういうことか（事象の意味・内容）
- ② いつから・どのようにしてそうなったのか（事象の起点・推移の過程）
- ③ 何・だれがそうしたのか（事象の主体）
- ④ なぜそうなったのか（事象の背景、事象間の因果関係）

⑤ 本当にそうだったのか・何によって分かるのか（事象の信憑性、論拠）

⑥ 他の地域や時代とどう違うのか（事象の特殊性・普遍性）

導入とまとめを重視し学習課題の解決に向けた思考・判断・表現等の活動を重ねることを通じて、言語活動の充実とともに、学習内容のより深い理解及び基礎・基本としての確かな定着が図られるのである。

#### 4 「日本史B」

##### (1) 目標

我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

目標は、次の部分からなっている。

第1の部分は、冒頭の「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ」までである。ここでは「日本史B」の基本的な性格を示している。指導に当たっては、同じ地理歴史科の世界史や地理との関連を一層重視して、我が国の原始・古代から現代に至る歴史の展開を、地理的条件や世界の歴史と関連付けて、政治、経済、社会、文化、国際環境など歴史を構成する要素を総合した幅広い見方で大きく把握させるようにする。なお「考察させ」とは、調べ考えることを重視して理解させることを意味している。

第2の部分は、「我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって」までである。歴史の展開を大きくつかませると同時に、各時代の特色とその変遷の総合的な考察を通じて、我が国の文化がどのような特色をもち、どのような伝統が形成されてきたかについての認識を深めることを一層重視するという趣旨を述べている。

第3の部分は、「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」という最後の部分で、「日本史A」と同じ文言である。両科目は、構成や学習内容において様々な相違があり、それぞれ独立した科目であるが、我が国の歴史を学習することによって得られる能力や態度については共通の目標を設定しているのである。諸事象の本質をその歴史的な形成、展開の過程の実証的な考察によってとらえる歴史的な見方や考え方を身に付け、歴史的な思考力の育成を図るとともに、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うことが、この科目の最終的なねらいであることを示している。

## (2) 内容の構成

「日本史B」の内容は、

- ① 原始・古代の日本と東アジア
- ② 中世の日本と東アジア
- ③ 近世の日本と世界
- ④ 近代日本の形成と世界
- ⑤ 両世界大戦期の日本と世界
- ⑥ 現代の日本と世界

の6つの大項目からなっている。

①では、人類が日本列島で生活を営み始めた旧石器文化の時代から平安時代までを扱い、原始・古代がどのような時代であったかを、東アジア世界の動向と関連付けて総合的に考察させることをねらいとしている。

②では、中世国家の成立から戦国時代までを扱い、中世がどのような時代であったかを、東アジア世界の動向と関連付けて総合的に考察させることをねらいとしている。

③では、安土桃山時代及び江戸時代を扱い、近世がどのような時代であったかを、国際環境と関連付けて総合的に考察させることをねらいとしている。

④では、ペリー来航から明治時代の末期までを扱い、近代国家の形成過程を、社会や文化の特色に留意し、国際環境と関連付けて総合的に考察させることをねらいとしている。

⑤では、第一次世界大戦前後から第二次世界大戦終結までの時期を扱い、近代国家の展開過程を、社会や文化の成熟という観点から、国際環境の変化と関連付けて総合的に考察させることをねらいとしている。

⑥では、第二次世界大戦終結以降を扱い、我が国の民主国家としての再生やその後の経済的発展などについて、国際環境と関連付けて総合的に考察させ、世界における日本の立場についての理解と認識を深めることをねらいとしている。

## (3) 指導計画の作成

### ア 基本的な考え方

我が国の歴史の展開について、政治や経済、社会、文化、国際環境など各時代の特色及びその変遷にかかわる総合的な考察や、それに基づく歴史的思考力の育成が重要である。

### イ 指導計画作成の手順

#### (ア) 指導目標の明確化

教科・科目の目標や内容構成の趣旨を的確にとらえ、生徒の実態等を踏まえて、指導目標を明確にする必要がある。

#### (イ) 授業時数の配分と内容構成の適正化

時間配分と内容構成を適正に行うように工夫する。

#### (ロ) 歴史を考察し表現する学習の重視

「歴史と資料」、「歴史の解釈」、「歴史の説明」、「歴

史の論述」という一連の学習を計画的に行うことで、歴史学習にかかわる基本的な技能を段階的に高めるようにする。

#### (ハ) 指導と評価の一体化

評価方法の工夫・改善に取り組み、指導と評価を一体化させ評価計画を作成する。

#### ウ 指導計画作成上の配慮事項

#### (ア) 国際環境や地理的条件との関連について

我が国の歴史と文化について各時代の国際環境や地理的条件などと関連付け、世界の中の日本という視点から考察させること。

#### (イ) 指導内容の精選と歴史の総合的な考察について

指導内容は、科目の目標に即して基本的な事項・事柄を精選して構成すること。その際、各時代の特色を総合的に考察する学習及び前後の時代を比較してその移り変わりを考察する学習それぞれの充実を図ること。

#### (ロ) 諸資料の活用について

年表、地図その他の資料を一層活用させるとともに、地域の文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫すること。

#### (ハ) 伝統や文化の学習について

文化に関する指導に当たっては、各時代の文化とそれを生み出した時代的背景との関連、外来文化などとの接触や交流による文化の変容や発展の過程などに着目させ、我が国の伝統と文化の特色とそれを形成した様々な要因を総合的に考察させるようにすること。衣食住や風習・信仰などの生活文化についても、時代の特色や地域社会の様子などと関連付け、民俗学や考古学などの成果の活用を図りながら扱うこと。

#### (ニ) 地域社会の歴史と文化の学習について

地域社会の歴史と文化について扱うようにするとともに、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それらを尊重する態度を育てること。

#### (4) 指導上の留意点

ア 「歴史と資料」、「歴史の解釈」、「歴史の説明」、「歴史の論述」を通じて、資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を段階的に高めていくこと。様々な資料の特性に着目させ複数の資料の活用を図って、資料に対する批判的な見方を養うとともに、因果関係を考察させたり解釈の多様性に気付かせたりすること。

イ 「歴史と資料」については、この科目の導入として位置付けること。「歴史の解釈」、「歴史の説明」については、原則として各時代の学習内容と関連させて適切な時期に実施する。「歴史の論述」については、

この科目のまとめとして位置付けること。

ウ 近現代史の指導に当たっては、客観的かつ公正な資料に基づいて、事実の正確な理解に導くようにするとともに、多面的・多角的に考察し公正に判断する能力を育成するようにすること。その際、核兵器などの脅威に着目させ、戦争を防止し、平和で民主的な国際社会を実現することが重要な課題であることを認識させること。

(5) 歴史を考察し表現する学習と導入・まとめの重視  
今回の改訂では、「日本史B」の内容に「歴史と資料」、「歴史の解釈」、「歴史の説明」、「歴史の論述」の各項目を設けた。これは、言語活動を充実させ、習得した知識・概念のより深い理解と定着を図るとともに、従前の大項目「(1) 歴史の考察」の趣旨を継承し、それを通史的な内容を扱う学習に取り入れることで、資料を活用して歴史を考察したりその結果を表現したりする技能を段階的に高めて、歴史的な見方や考え方を身に付けさせることをねらいとするものである。

「歴史と資料」は、この科目の導入として位置付けられている。この学習を通じて、歴史資料から歴史的な事象を読み取る技能、資料に基づいて歴史が叙述されることへの理解、歴史への関心、文化財保護の重要性にかかわる理解などを育てる。例えば埼玉県に関する平城京出土の木簡を歴史資料として取り上げ、文字を読み取らせることによって、武蔵国から見た律令体制を考察させることができる。

「歴史の解釈」は、通史的な学習内容とかわらせて適切な時期に実施する。この学習を通じて、歴史的な事象の推移や変化、因果関係にかかわる思考力、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈する思考力・判断力などを育てる。例えば、上尾市の地形図を取り上げることで、地頭方、平方領領家、耆丁目の地名から下地中分など土地支配の変化に着目させ、地域社会における武士の土地支配を考察させることができる。

「歴史の説明」は、通史的な学習内容とかわらせて適切な時期に実施する。この学習を通じて、歴史の解釈の多様性にかかわる理解、解釈を成り立たせる根拠や論理にかかわる思考力・判断力、根拠をもとに考えを筋道立てて説明する思考力・表現力などを育てる。

例えば、埼玉県立文書館や太田市立縁切寺満徳寺資料館（群馬県太田市）などが所蔵する江戸時代の「みくだり半」を取り上げ、家における女性の地位の低さの象徴と見る解釈と、妻の再婚に際し重婚でないことを証明する文書であったという解釈もあることに気付かせる。それぞれの解釈を成り立たせている根拠となる資料や農村における女性の労働の役割などに留意しながら、複数の解釈についての考えを筋道を立てて説

明させることが考えられる。

「歴史の論述」は、この科目のまとめとして位置付けられている。この学習を通じて、それまでに習得した内容を活用して適切な主題を設定する技能や思考力、設定した主題を踏まえて適切な資料を収集・選択する技能、収集した資料を活用して主題を探究する思考力・判断力、探究した成果を根拠をもとに筋道立てて論述する思考力・表現力などを育てる。なお、「科目のまとめとして位置付ける」とは、この項目が「日本史B」の学習全体のまとめの役割を担うという意味であり、必ずしもすべての学習内容を終えてから実施しなければならないということではない。

指導計画の作成に当たっては、この歴史を考察し表現する学習を単発的・トピック的な学習に終わらせず、通史的な学習内容とかわらせて実施するとともに、それを通じて段階的に育てた力がそれ以後の学習場面で繰り返し活用されて一層成長するよう、学習全体を計画的・継続的に実施する。例えば、導入で生徒に自覚させる学習課題としては、次のようなものが考えられる。

- ① どういうことか（事象の意味・内容）
- ② いつから・どのようにしてそうなったのか（事象の起点・推移の過程）
- ③ 何・だれがそうしたのか（事象の主体）
- ④ なぜそうなったのか（事象の背景、事象間の因果関係）
- ⑤ 本当にそうだったのか・何によって分かるのか（事象の信憑性、論拠）
- ⑥ 他の地域や時代とどう違うのか（事象の特殊性・普遍性）

導入とまとめを重視し学習課題の解決に向けた思考・判断・表現等の活動を重ねることを通じて、言語活動の充実とともに、学習内容のより深い理解及び基礎・基本としての確かな定着が図られるのである。

## 5 「地理A」

### (1) 目標

現代世界の地理的な諸課題を地域性や歴史的背景、日常生活との関連を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

「地理A」の学習は、作業的、体験的な学習を通して、現代世界が抱える諸課題や生活面にみられる諸課題を地理的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を身に付けさせることがねらいである。さらには、そうした学習を通じて、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資

質を養うことをねらいとしている。

このようなねらいを達成するためには、地域の歴史的背景を考慮して空間軸と時間軸の両面から現代世界の認識を深めるとともに、日常生活の中から題材をとるなどして進める諸事象の考察が求められている。

なお、地理的な見方や考え方は、

- ・諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりであらえ、地理的事象として見いだすこと。また、そうした地理的事象の空間的な規則性や傾向性をとらえること。
- ・そうした地理的事象やその空間的な配置、秩序などを成り立たせている背景や要因を、地域という枠組みの中で追究し、とらえること。
- ・諸地域を比較し関連付けて、地域性を一般的共通性と地方的特殊性の視点から追究し、とらえること。
- ・そうした地理的事象が見られる地域の変容をとらえ、地域の課題や将来像について考察すること。

などを意味している。

## (2) 内容の構成

「地理A」の内容は、

### ① 現代世界の特色と諸課題の地理的考察

### ② 生活圏の諸課題の地理的考察

の二つの大項目から構成されている。

これらの大項目は、いずれも作業的、体験的学習を取り入れながら、①は、「地球儀や地図からとらえる現代世界」、「世界の生活・文化の多様性」、「地球的課題の地理的考察」といった内容で構成され、現代世界の地理的認識を深めること、②は、「日常生活と結び付いた地図」、「自然環境と防災」、「生活圏の地理的な諸課題と地域調査」といった内容で構成され、生活圏などの地域規模の地理的事象や諸課題の地理的認識を深めることが求められている。

また、いずれの大項目における内容の構成においても、地理的な見方や考え方を身に付けさせるような指導が不可欠である。

## (3) 指導計画の作成

### ア 基本的な考え方

グローバル化の進展等社会の変化に伴う現代世界が抱える諸課題や地域にみられる諸課題を、地理的に考察することに重点を置いて学習することができるよう、作業的、体験的な学習を取り入れたり、それらの諸課題を日常生活と関連付けて取り扱ったりして、生徒の興味・関心に配慮した内容や方法を工夫する必要がある。

### イ 指導計画作成の手順

#### (ア) 指導目標の明確化

教科・科目の目標や内容構成の趣旨を的確にとら

え、生徒の実態等を踏まえて、指導目標を明確かつ具体的にすることがある。

#### (イ) 内容構成の工夫

現代世界や地域が取り組んでいる諸課題を、空間的な視点で分析するという地理的特質を生かして考察し、それらに対する理解を深めるとともに、地理的な見方や考え方に慣れ親しませる学習ができるよう、学校の実情、生徒の実態や年間授業時数等を考慮して、内容構成を工夫し、主題的な学習の充実を図る。

#### (ウ) 指導方法の工夫

知識中心の学習に偏ることなく、生徒の特性等に応じて主体的な学習が展開できるよう、学習過程を重視した指導方法を工夫する。また、作業的、体験的な学習を通して地理的技能を身に付けさせ、それらを活用する学習の充実を図る。

#### (エ) 評価を見据えた指導の工夫・改善

指導と評価の一体化を図りながら学習のねらいを定着させるよう、評価をみすえた指導内容及び指導方法の一層の工夫・改善が必要である。

## ウ 指導計画作成上の配慮事項

### (ア) 指導内容の精選

基本的な事項・事柄に重点を置き、学習指導要領が示す内容構成の趣旨とねらいに基づいて、科目の目標が達成できるよう指導内容の精選に留意する。

### (イ) 地理的技能育成への配慮

地理情報の活用に関する技能と地図の活用に関する技能としての「地理的技能」は、地理的な見方や考え方と同様、一過性の学習や経験で身に付くものではない。したがって、それらにかかわる学習を繰り返す中で次第に習熟度を高めて身に付けさせるよう、系統性に留意して計画的に指導できるよう配慮する。また、指導の際には、教科用図書「地図」や情報通信ネットワークなどの活用を工夫する。

なお、「地理的技能」は、次のようにとらえられる。

(地理情報の活用に関する技能)

- ・諸情報の中から地理情報を選別する技能
- ・地理情報を収集する技能
- ・情報を地理情報化する技能
- ・地理情報の処理や表現に関する技能 など

(地図の活用に関する技能)

- ・地図に慣れ親しみ、地図を頼りに訪ね歩く技能
- ・地図や地図帳に親しみ、地名に関心をもち、その位置を確かめること
- ・地図から地理的情報を読み取る技能
- ・地域の事象や情報を地図化する技能
- ・略地図を描き説明する技能 など

### (ウ) 言語活動の充実

読図や作図など通じて地図を有効に活用し事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動が充実したものになるよう配慮する。

(四) 政治、経済、生物、地学的な事象などの扱い  
必要に応じて政治、経済、生物、地学的な事象も扱いながら、それらの学習成果は地域性をとらえるために活用する。その際、「現代社会」及び「政治・経済」と、地学や生物に関する科目など、相互の科目の特性などを考慮し、関連、調整を図るよう留意する。

(五) 日本の取扱い  
学習の内容に応じて、日本は現代世界を構成する地域の一つとして扱う。また、事例としての各地域と日本とを必要に応じて比較したり関連付けたりして、現代世界に対する認識が深められるよう工夫し、地理的な見方や考え方の育成を図り、広い視野から国際社会における日本の役割について考えさせるよう留意する。

(4) 指導上の留意点  
ア 「現代世界の特色と諸課題の地理的考察」で取り上げる世界の生活・文化や地球的課題については、世界を広く大観する学習と事例地域・具体例を通して考察する学習を適切に組み合わせて扱うよう工夫する。

イ 「生活圏の諸課題の地理的考察」で取り上げる日常生活と結び付いた地図については、地形図だけでなく、市街図や道路地図など日常生活の中でみられる様々な地図を素材として扱い、目的や用途に適した地図表現の工夫などについて理解させ、地図の役割とその有用性について認識させるよう工夫する。

ウ 「生活圏の諸課題の地理的考察」で取り上げる自然災害と防災については、早くから自然災害への対応に努めてきた日本国内や県内の具体例を取り扱いながら、地形図やハザードマップなどの読図といった地理的技能を身に付けさせるとともに、防災意識を高めるよう工夫する。

エ 「生活圏の諸課題の地理的考察」で取り上げる生活圏の地理的な諸課題と地域調査については、それまでの学習成果を活用しながら、生徒の興味・関心に配慮し、学校が位置しているそれぞれの地域にふさわしい観察や調査を工夫する。その際、地域調査を行う対象地域や調査方法は、学校の状況や調査内容の設定に応じ、弾力的かつ柔軟に考えて調査の実施を図る。

(5) 指導計画の例  
「(2) 生活圏の諸課題の地理的考察」の「ア 日常生活と結び付いた地図」

○ 地図を活用した作業的、体験的な学習（例）  
－日常生活と結び付いた地図－

- 1 目標
  - ア 地図からの地理情報の読み取りや地理情報の地図化の技能を身に付けさせる。
  - イ 日常生活の中でみられる様々な地図を題材にして、目的や用途に適した地図表現の工夫などについて理解させる。
- 2 展開例
  - ア 導入  
個人やグループで、学校周辺の地形図や住宅地図、道路地図、観光案内図などを集めさせる。
  - イ 展開
    - ・集めた地図から学校周辺の様子を読み取らせ読み取れる事柄や表現の仕方を比較させる。
    - ・通学範囲や通学ルート、買い物場所など日常生活の中からテーマを選ばせ、集めた地図の一つを基図にして地図を作成させるとともに、その地図から読み取って欲しいことを記させる。
  - ウ まとめ  
作った地図を交換して互いに読み取らせ、それぞれが読み取って欲しいことの理解度や地図化の適切さについて確認させる。
- 3 評価の観点
  - ア 地図から地理情報を的確に読み取るなど、地理情報を適切な地図表現で地図化することができる。
  - イ 身の回りにある様々な地図を取り上げ、それぞれの地図表現などにみられる長所や短所を理解している。

6 「地理B」

(1) 目標

現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

「地理B」の学習は、現代世界の地理的事象を系統地理的（現代世界の諸事象を項目別に追究して各地の地域性を明らかにする方法）、地誌的（多様な地域を規模に応じて多面的・多角的に追究して各地域の特色を明らかにする方法）に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を身に付けさせることがねらいである。さらには、そうした学習を通じて、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養うことを目指すのをねらいとしている。

なお、地理的な見方や考え方については、5の地理A「(1) 目標」を参照されたい。

(2) 内容の構成

「地理B」の内容は、

- ① 様々な地図と地理的技能
- ② 現代世界の系統地理的考察
- ③ 現代世界の地誌的考察

の3つの大項目から構成されている。

①は、「地理情報と地図」、「地図の活用と地域調査」といった内容で構成され、地図の有用性に気付かせるとともに、地理的技能を身に付けさせること、②は、「自然環境」、「資源、産業」、「人口、都市・村落」、「生活文化、民族・宗教」といった内容で構成され、諸事象の空間的な規則性、傾向性やそれらの要因などを系統地理的に考察させるとともに、現代世界の諸課題について地球の視野から理解させること、③は、「現代世界の地域区分」、「現代世界の諸地域」、「現代世界と日本」といった内容で構成され、現代世界の諸地域を多面的・多角的に考察し、各地域の多様な特色や課題を理解させるとともに、現代世界を地誌的に考察する方法を身に付けさせることが求められている。

(3) 指導計画の作成

ア 基本的な考え方

様々な地図の読図や作図などの作業的、体験的な学習によって地理的技能を身に付ける学習と、系統地理的な考察を通じて現代世界に関する知識や概念を習得する学習、さらには、それらの成果を活用して、現代世界の諸地域の特色や諸課題を地誌的に考察、探究する学習ができるよう、生徒の興味・関心に配慮した内容や方法を工夫する必要がある。

イ 指導計画作成の手順

(ア) 指導目標の明確化

教科・科目の目標や内容構成の趣旨を的確にとらえ、生徒の実態等を踏まえて、指導目標を明確かつ具体的にすることが必要である。

(イ) 内容構成の工夫

地理的技能の育成を主眼とした学習、系統地理的な学習、地誌的な学習で、それぞれのねらいの達成を図るとともに、それらの成果を踏まえて我が国の地理的な諸課題を探究する学習ができるよう、生徒の実態や年間授業時数等を考慮して、内容構成を工夫する。

(ロ) 指導方法の工夫

知識中心の学習に偏ることなく、生徒の特性等に応じて主体的な学習が展開できるように、学習過程を重視した指導方法を工夫する。また、体験的、作業的な学習を通して地理的技能を身に付けさせ、それらを活用する学習の充実を図る。

(ハ) 評価をみずえた指導の工夫・改善

指導と評価の一体化を図りながら学習のねらいを定着させるよう、評価をみずえた指導内容及び指導方法の一層の工夫・改善が必要である。

ウ 指導計画作成上の配慮事項

5の地理A「(3) 指導計画の作成」の「ウ 指導計画作成上の留意事項」と同様に扱うものとする。

(4) 指導上の留意点

ア 「様々な地図と地理的技能」を学習する際には、地球儀や地図の活用、地理情報の収集、選択、処理、諸資料の地理情報化や地図化などの作業的、体験的な学習を取り入れるとともに、各学習内容を関連付けて地理的技能が身に付くよう工夫する。

イ 「様々な地図と地理的技能」で取り上げる地図の活用と地域調査については、それまでの学習成果を活用しながら、生徒の興味・関心に配慮し、学校が位置しているそれぞれの地域にふさわしい調査を工夫する。その際、地域調査を行う対象地域や調査方法は、学校の状況や調査内容の設定に応じ、弾力的かつ柔軟に考えて調査の実施を図る。

ウ 「現代世界の系統地理的考察」を学習する際には、分析、考察の過程を重視し、現代世界を系統地理的にとらえる視点や考察方法が身に付くよう工夫する。

エ 「現代世界の地誌的考察」で取り上げる現代世界の地域区分については、現代世界が自然や文化などの指標によって様々な地域区分できることに着目させ、それらを比較対照させることによって、地域概念、地域区分の意義などを理解させるようにする。

オ 「現代世界の地誌的考察」で取り上げる現代世界の諸地域については、様々な規模の地域を世界全体から偏りなく取り上げるようにするとともに、静的な方法や動的な方法、二つの地域を比較する方法といった三つの地誌的考察方法を用いて学習できるように工夫する。

(5) 指導計画の例

「(3) 現代世界の地誌的考察」の「ウ 現代世界と日本」

○ 言語活動の充実を図る学習(例)  
ー災害に強い国土づくりー

1 目標

ア 自然災害の観点からみた日本の国土の特色について多面的・多角的に考察させる。

イ 地図を活用して災害に強い国土づくりについて説明、論述させる。

2 展開例

ア 課題の設定

個人またはグループで地震・火山災害や気象災害の発生場所や規模，それらを防ぐための人々の努力について調べさせ，それぞれの被害を防いだし，小さくしたりするため，今後どう国土づくりをしたらよいか，たとえば「高い堤防と河川の直線化で洪水を防げるか」といった具体的な形で課題を設定させる。

イ 課題の探究

- ・これまでの学習成果などを踏まえながら，肯定的な立場，否定的な立場から，設定した課題についての整理，分析を行わせる。
- ・整理，分析をもとにグループあるいはクラス全体で望ましい国土づくり，たとえば洪水の防止，洪水被害を小さくするための土地利用のあり方などについて話し合わせる。

ウ まとめ・発表

話し合いの成果を，地図化してまとめたり，適切な地図を用いたレポートとしてまとめたりさせ，地図の掲示や提言などの形で発表させる。

その際，発表に対する十分な協議が行われるよう配慮する。

3 評価の観点

ア 自然災害の観点からみた日本の国土の特色について多面的・多角的に考察している。

イ 適切な地図を活用しながら，どうしたら災害に強い国土づくりができるかについて自分の意見を説明，論述できる。